

日本で読まれた『無量壽經』

—「女人成佛」を保証する経典—

小林 信彦*

A

インド文献『スカーヴァティー・ヴィューハ』(sukhāvativyūha)によると、ボーディサットヴァ(bodhisattva/菩薩)として前世で修行をしたいた頃のアミターバ(āmitābha/阿彌陀)は、47項目の「決心」(praṇidhāna/誓願)をした。その第35番目は「ブツダの国」(buddha-kṣetra/佛國土)の女たちに関するものである。

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, samantād aprameyāsaṃkhyeyācintyātulyāparimāneṣu buddhakṣetreṣu yāḥ striyo mama nāmadheyam śrutvā, prasādam saṃjanayeyur bodhicittaṃ cotpādayeyuḥ, strībhāvaṃ ca vijugupsyeran, jātivyativṛttāḥ samānāḥ saced dvitīyaṃ strībhāvaṃ pratilabheran, mā tāvad aham anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambudhyeyam (*Sukhāvativyūha*, ed. Ashikaga, Kyoto 1965, p. 18).

Blessed One, may I not awaken to unsurpassable, perfect, full awakening if, after I attain awakening it is the case that women in measureless, countless, inconceivable, incomparable, and limitless buddha-fields in all regions of universe upon hearing my name have

* 本学文学部

キーワード：無量壽經，源空，女人成佛，十念，變成男子

serene thoughts of faith, generate in their mind the aspiration to attain awakening, feel disgust at their female nature, and yet are reborn again as women when they leave their present birth. (Luis O. Gómez, *The Land of Bliss*, Honolulu 1996, p. 74)

ここでボーディサットヴァ時代のアミターバが気を配っているのは、「限りなく多くのブツダの国にいる女たち」である。アミターバ自身の「ブツダの国」に女はいないが、女がいる「ブツダの国」もあり、例えばアクショージャ (akṣobhya/阿閼) の「ブツダの国」には女がいて、出産もするし子育てもする。女の身体をとっている以上、たとえ「ブツダの国」にいても、そのままではブツダになれない。このような女たちが未来の人生で男の身体をとるようにしてやろうと修行時代のアミターバは心に決めたのである。

この『スカーヴァティー・ヴィューハ』は、「無量壽經」という表題で中国語に翻訳された。「数え切れないほど多くのブツダの国にいる女たち」に言及する箇所は、この翻訳で次のようになっている。

設我得佛 十方無量不可思議諸佛世界 其有女人 聞我名字 歡喜信樂 發菩提心 厭惡女身 壽終之後復爲女像者 不取正覺 (『無量壽經』, 『大正』12, p. 268, c. 21-24)

^{たと}設ひ我れ佛を得むとも、十方無量の不可思議の諸佛世界に其れ女人有りて、我が名字を聞きて、歡喜信樂して菩提心を發し、女身を厭惡し、壽終の後に復た女の像^{すがた}と爲らば、正覺を取らじ。

原文で「いたる所にあつて、測ることも数えることも考えることも比べることもできないほど限りなく多くのブツダの国にいる女たち」(samantād aprameyāsamkhyeyācintyātulyāparimāneṣu buddhakṣetreṣu yāḥ striyaḥ)とされている箇所は、「十方無量不可思議諸佛世界 其有女人」と丹念に訳され、アミターバの関心が「ブツダの国」にいる女たちに向けられていることを明確に伝えている。ここで示される「決心」を見る限り、「ブツダの国」にいない女たちに対しては、「いつか男に生まれ変わらせてやる」などとは約束していないことになる。

B

日本では源空（1133-1212）が『無量壽經釋』を書き、問題の個所に解説を加えている。前世でアミターバが第35番目に「決心」したことは、「女人往生の願」と呼ばれている。ところで、源空によると、すでに「念佛往生の願」や「來迎引接の願」があって、男女を問わず「往生」を保証しているにもかかわらず、第35番目に改めて「女人往生の願」を設けたという。

別約女人 發願云 設我得佛 其有女人 聞我名字 歡喜信樂發菩提心 厭於女身 壽終之後復爲女像者 不取正覺矣（『無量壽經釋』、『昭和新修法然上人全集』, p. 75)

別して女人に約して發願して云く、「^{たと}設ひ我れ佛を得むとも、其れ女有りて、我が名字を聞き、歡喜信樂して菩提心を發し、女身を厭ひ、壽終の後に^{ふたた}復び女の像たらば、正覺を取らじ」と。

ここで源空が「念佛往生の願」と呼んでいるのは、『無量壽經』に挙げられている「決心」18のことである。それによると、前世で修行していた頃のアミターバは、「自分がブツダになった暁には、最も重い罪を犯した者とブツダの教えに逆らう者を除いて、すべての人々を自分の国に生まれるようにしてやる」と公約している。

設我得佛 十萬衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法（『無量壽經』、『大正』12, p. 268, a.26-28)

設ひ我れ佛を得むとも、十萬の衆生、至心信樂して、我が國に生るることを欲して、乃至十念して、若し生れずば、正覺を取らじ。唯、五逆と正法を誹謗するとを除く。

この「決心」18に見られる「乃至十念」という表現のサンスクリット原文は、“antaśo daśabhiś cittopādaparivartaiḥ”（10回もブツダになろうと決意して）である。

また、源空が「來迎引接の願」と呼んでいる「決心」19があり、前世のアミターバは、「ブツダになろうと決意して頑張っている人が私の国に生まれ

たいと思っていれば、死に際に必ず迎えに行つてやる」と公約している。

設我得佛 十方衆生 發菩提心 修諸功德 至心發願 欲生我國 臨終壽時 假令不與大衆圍遶 現其人前者 不取正覺 (『無量壽經』, p. 268, a. 29-b.2)

設ひ我れ佛を得むとも、十方の衆生、菩提心を發して、諸の功德を修し、至心に發願して、我が國に生ぜんを欲し、壽の終はる時に臨みて、たとひ大衆のために圍遶せられて、其の人の前に現ぜずば、正覺を取らじ。

さらに、「繫念定生の願」と呼ばれる第20の「決心」があり、前世のアミターバは、「私の名前を聞き、私の國に思いを寄せて、私の國に生まれることを望むなら、必ずそのようにしてやる」と公約している。

設我得佛 十方衆生 聞我名號 係念我國 殖諸徳本 至心迴向 欲生我國 不果遂者 不取正覺 (『無量壽經』, p. 268, b. 3-5)

設ひ我れ佛を得むとも、十方の衆生我が名號を聞き、我が國を係念して、諸の徳本を殖ゑて、至心に迴向して、我が國に生まれむと欲し、果遂せずば、正覺を取らじ。

「十萬の衆生」にはヒトの雌も含まれているはずであるから、この二つの「決心」によって、女もアミターバの國へ行かせてもらえることになる。それにもかかわらず「女人往生の願」があるのはなぜか。源空によると、女は「とが」(過)が多く、あらゆる所で嫌われているという。まともに「往生」できるとは考えられていないのである。したがって、この疑念を解くために、別に「女人往生の願」を設けたというのである。「決心」18は補足条項ということになる。

稱名念佛 是彼佛本願行也 故修之者 乘彼佛願 必得往生由願不虛故 以念佛爲正定之業也 (『無量壽經釋』, p. 81)

稱名念佛、是れ彼の佛の本願の行なり。故に之を修する者、彼の佛の願に乗じて、必ず往生することを得。願虚しからざるに由るが故に、念佛を以て正定の業と爲すなり。

就此有疑 上念佛往生願 不厭男女 來迎引導互男女 繫生定生願亦然也 今別有此願 其心如何 案斯事 女人障重 明不約女人者 即生疑心 其由者 女人過多障重 一切處所嫌 (ibid., p. 75)

此れに就きて疑ひ有り。上の念佛往生の願、男女を厭はず。來迎引導も男女に互る。繫生定生の願もまた然り。今別に此の願（女人往生の願）有り。其の心、如何。斯の事を案ずるに、女人、障重くして、明かに女人に約せずば、即ち疑心を生ぜむ。其の由は、女人過多く障り重くして、一切の處に嫌はれたり。

C

『スカーヴァティー・ヴィューハ』でも、その中国語訳『無量壽經』でも、いつかアミターバが男に「轉生」させようとしているのは、「途方もなく多くのブツダの国」（十方無量不可思議諸佛世界）にいる女たちであって、現世の女たちではない。ところが、源空が取り上げようとしているのは現世の女たちである。そこで、『無量壽經』から引用する際に、「十方無量不可思議諸佛世界」という限定句を削除している。

こうして、「多くのブツダの国」の女たちに関してなされた「決心」は、この世の女たちに関する「決心」と解釈する余地が生じることになった。ここで、「十方無量不可思議諸佛世界」という限定句を削除したことを「了解の上での省略」と見なすとしても、この「不可思議諸佛世界」の中にこの世（娑婆）を含めることは、源空の立場ではできないであろう。「淨土」と「穢土」の対立が日本淨土教の大前提である以上、「阿彌陀淨土」に代表される「不可思議諸佛世界」は、「穢土」である「娑婆」と次元を異にするはずである。まさか、「阿彌陀淨土」以外の「ブツダの国」をすべて「穢土」と考えていたわけではあるまい。「十方無量不可思議諸佛世界」の削除は、「了解の上での省略」ではなかった。源空は意図的にテキストを改竄したのである。

『無量壽經』の意図はともかく、源空の立場から見れば、「阿彌陀淨土」への「往生」は、男なら誰にでも与えられている恩恵である。そして、女も含

めてすべての人間に与えられていてしかるべき恩恵である。ただし、源空によれば、『妙法蓮華經』で説かれているように、女の場合は「五障」があって、あらゆる所で嫌われているという (loc. cit.)。「五障」ゆえに嫌われている女たちにも「往生」への道が開けていることを示すことこそ、源空にとって緊急の課題であった。

ところが、『妙法蓮華經』で「女人身猶有五障」（女人の身に、なほ五障有り）と言われる際に「五障」という語が指すのは、インドラの地位やブツダの地位など、「女の身体をしていては就けない五つの地位」であり、女に特有の道徳的欠陥ではない。源空の主張する「女人往生」は、『妙法蓮華經』の読み間違いを前提として構想されたものである。そして、この読み間違いは最澄（767-822）に溯る。

D

『無量壽經』の「決心」35が「女人往生の願」であるという源空の判断、そして女が死後に安樂を得ることを保証しているという源空の解釈は、「人間なら誰でもアミターバの国へ行ける」という前提があった上のことである。そして、その典拠として、源空は「念佛往生の願」と呼ばれる「決心」18を挙げています。

然則念佛之人皆以〔當〕往生 以何得知 即念佛往生願成就文云 諸有衆生 聞其名號 信心歡喜 乃至一念 至心迴向 願生彼國 即得往生 住不退轉 是也（『無量壽經釋』, p. 73）

然れば則ち念佛の人、皆、以て當に往生すべし。何を以てか知ることを得る。即ち念佛往生の願成就の文に云ふ。「諸の衆生有りて、其の名號を聞きて信心歡喜して、乃至一念、至心に迴向して、彼の國に生ぜむと願ずれば、即ち往生を得て不退轉に住す」と。是れなり。

ところが、「念佛の人皆もって往生すべし」という源空の主張は、『大無量壽經』の「決心」18から導くことができないのである。そこで公約されているのは、「ブツダになろうと決意して、アミターバの国に行きたがっている

なら、必ず望みを叶えてやる」ということであり、次の「決心」19では「ブツダになろうと決意すること」（發心）と「ボーディサットヴァの活動」（菩薩行）が条件として挙げられている（「菩提心を發し、諸の功德を修して」）。アミターバの目的が片っ端から人々をブツダにすることであるにしても、大乘仏教で定められている条件は、ちゃんと守られているのである。そして、親殺しなどの重罪を犯した者（五逆）やブツダの教えに逆らう者（誹謗正法）は除かれる。「念佛の人」が無条件で「往生」できるなどとは、示唆さえされていない。

十萬衆生至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者不取正覺 唯除五逆
誹謗正法（『無量壽經』、『大正』12, p. 268, a.26-28）

〔「決心」18:〕十萬の衆生、至心信樂して、我が國に生るることを欲して、乃至十念して、若し生れずば、正覺を取らじ。唯、五逆と正法を誹謗するとを除く。

源空が「念佛往生の願」と呼ぶこの「決心」には、アミターバの名前を唱えることへの言及はどこにもない。この条文を根拠に「俺の名前を唱えれば、必ず俺の国に来させてやる」などという約束を取り付けることはできない。これは「念佛往生の願」ではないのである。

ここに見られる「乃至十念」という表現は、“antaśo daśabhiścittopā dāparivartaiḥ”（10回もブツダになろうと決意して）というサンスクリット表現を訳したものである。「念」は「思い詰める」/「〔それ以外はないと〕心を定める」という意味で用いられている。「乃至」という語は「数または量の限界」（so many as ~）を指すサンスクリット表現（yāvat/antaśas）の中国語訳として慣習的に用いられている（antaśo daśa: so many as ten）。

「乃至十念」という語句で翻訳者が表そうとしたのは、「〔ブツダになろうと〕10回も心を定めて」という意味である。ところが、源空はこの「念」を「ブツダを心に浮かべること」と理解した。そして、さらに「念と聲とは一なり」と言って（『無量壽經釋』, p. 74）、「ブツダを心に浮かべること」を「ブツダの名前を唱えること」を同一視した。

觀經下品下生云 令聲不絶 具足十念 稱南無阿彌陀佛 稱佛名故 於念念中 除八十億劫生死罪 今依此文 聲即是念 念則是聲 其意曉矣 (『無量壽經釋』, p. 73)

觀經の下品下生に云く。聲をして絶たざらしめ、十念を具足し、南無阿彌陀佛と稱ふ。佛名を稱ふるが故に、念念の中に於て八十億劫の生死の罪を除く。今此の文に依るに、聲即ち是れ念、念即ち是れ聲なること、其の意、曉かなり。

稱名念佛 是彼佛本願行也 故修之者 乘彼佛願 必得往生由願不虛故 以念佛爲正定之業也 (『無量壽經釋』, p. 81)

稱名念佛、是れ彼の佛の本願の行なり。故に之を修する者、彼の佛の願に乗じて、必ず往生することを得。願虚しからざるに由るが故に、念佛を以て正定の業と爲すなり。

このようにして、『無量壽經』で示される「仏になろうと決心すること」という条件は、「声を出して南無阿彌陀仏と云うこと」にすり替えられたのである (「決心する」/「[それ以外はないと]心を定める」→「阿彌陀仏を心に浮かべる」→「声を出して南無阿彌陀仏と10回言う」)。源空がこのように奇想天外な読み間違いをしたのも、それなりに理由があつてのことである。

E

中国語の仏教術語「念」が指すのは、パーリで伝わる古い仏教で言われる「いつも覚えていること」/「忘れてはいけないこと」(anussati/anusmṛti)である。『ディーガニカーヤ』(dīghanikāya)によると、「忘れてはいけないこと」は6項目ある (*Dīghanikāya*, 3, ed. Carpenter, London 1911, pp. 250, 280)。

- ① ブッダ (buddha/佛)
- ② ブッダの教え (dhamma/法)
- ③ ブッダの教えに専念する人々の集団 (saṅgha/僧伽)
- ④ 心掛け (sīla/戒)

⑤ 持っているものを捨てること (cāga/施)

⑥ 神々 (devatā/天)

これに「呼吸を整えて精神集中すること」(ānāpāna) など、4項目が追加されて (*Āṅguttaranikāya*, 1, ed. Morris, London 1885, p. 30), 合計10項目となり、中国では「十念」として知られていた (『増一阿含經』34)。忘れずに覚えていなければならないのであるから、これは心の作業であって音声を用いる作業ではない。そして、その後の中国人もこのことをよく理解していた。

中国文献『觀無量壽經』の末尾に近い所で、「十念」という言葉が使われ、「十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せしむ」(〔令〕具足十念稱南無阿彌陀佛) と言われている (『大正』40, p. 346, a.17)。このことに関連して、ボーディルチ (bodhiruci/菩提流支) から『觀無量壽經』を教わった曇鸞 (476-542) は、次のように述べている。

此中云念者 …… 但言憶念阿彌陀佛 若總相若別相 隨所觀緣 心無他相 十念相續名爲十念 但稱名號亦復如是 (『無量壽經優婆塞舍願生偈婆薮槃頭菩薩造註』上, 『大正』40, p. 834, c.14-17)

此の中に念と云ふは、…… 但し、阿彌陀佛を憶念するを言ふのみ、若しくは總相、若しくは別相、觀緣する所に隨ひて心に他相なく、十念相續するを名づけて十念と爲す。但だ名號を稱するも亦復た是の如し。

「阿彌陀佛を憶念するを言ふのみ」と言って、曇鸞は正しい仏教伝統に添って、中国文献『觀無量壽經』の「念」を「忘れてはいけないこと」として理解している。『觀無量壽經』のこの個所に出ている「念」は、曇鸞の注釈によると、「忘れてはいけないこと」の全項目を指すのではなく、この文脈では第1項目の「佛」に限定されるという。「佛」の姿を心に浮かべるにしても、「佛」の名前を唱えるにしても、他のことに気をとられずに一点に集中することが「念」であると言っている。

ところが善導 (613-681) は、「念」という語を取り上げて論じているが、

「念」を「声を出すこと」(聲)と解釈する。仏教の伝統を無視し、中国の解釈伝統も無視したもので、はなはだ突飛で独りよがりな解釈である。

願生浄土 上盡百年 下至は七日一日十聲三聲一聲等 命欲終時 佛與聖衆自來迎接 即得往生 (『観念阿彌陀佛相海三昧功德法門』, 『大正』47, p. 28, a.20)

浄土に生まれむと願はば、上は百年を盡し、下は七日一日の十聲三聲一聲に至る。命の終らむと欲する時、佛は聖衆と與に自ら來りて迎接し、即ち往生を得。

この突飛な善導をなぜだか源空は非常に尊敬していた。そして、インド文献『無量壽經』を読んでいた時にも、源空の念頭にあったのは常に善導の言葉であった。こうして、善導の言うことを真に受けた源空は、テキストにある「乃至十念」(〔仏になろうと〕10回も心を定めて)という言葉を取り上げて、「十念」を「南無阿彌陀仏と10回唱えること」を指すと決めつけてしまった。

古い仏教で提示された心の作業は、音声を用いる作業に変換されたのである。そして、この変換作業を行ったのは、古い仏教の伝承とは全く関係のない「十念」を取り上げた際であった。“antaśo daśabhiś cittopādaparivartaiḥ” (〔ブツダになろうと〕10回も心を定めて) というサンスクリット表現を訳そうとして、「十念」という中国語表現を用いたのである。

「忘れてはいけないこと」への言及が見られるのは、パーリで伝えられる古い仏教文献に限られていて、サンスクリットの文献には例がない。現に『スカーヴァティー・ヴィューハ』のテキストに見られるのは“cittopāda”であって、“anusmṛti”ではない。そして、“cittopāda”は「ブツダになろうと決心すること」という意味である。古い仏教で設定された「忘れてはいけないこと10項目」は經典制作者の念頭に全くなかったのである。

『無量壽經』のテキスト理解という点で、源空のしたことは間違いである。『無量壽經』の「決心」18は、「阿彌陀の名前を唱えさえすれば、必ず浄土へ行くことができる」という主張の典拠とはなりえないのである。

F

アミターバの「決心」は、50近い項目が全体として体系を成しているものであり、仮に「決心」18で「ブツダの名前を唱えること」が条件として挙げられているとしても、それだけを取り出して19を無視すると、「アミターバの名前を唱えること」だけで自動的にアミターバの国へ行けることになる。人間に限らず、音声を出せる動物なら、「アミターバの名前を唱えること」が可能である。そうすると、「ブツダになろうと決意すること」や「ボーディサットヴァの活動」は不要になり、「決心」19は無効ということになる。そして、「ボーディサットヴァの活動」に全く関与しない者がアミターバの名前を唱える場合、「アミターバの国に行くことができるが、迎えに来てもらえない」という矛盾に陥る。

ところが、源空はアミターバの「決心」を体系として見ておらず、「決心」18を取り上げる際には19を全く無視しているのである。源空のやり方で「決心」19の単独有効性を認めるとすれば、「ブツダになろうと決意すること」と「ボーディサットヴァの活動」について条件を満たささえすれば、アミターバの名前を唱えなくとも、アミターバの国へ行けることになる。

しかも、「決心」18の単独有効性を認める源空は、アミターバの国に行く条件を「アミターバの名前を唱えること」だけに限定するのである。そうすると、「ボーディサットヴァの活動」を熱心に行った人間は、アミターバの国に行く資格がないことになり、たまたまアミターバの名前を発したオウムやインコは大いに資格があることになる。

では、源空が「決心」の単独有効性を一貫して認めているかという点、決してそうではない。「十方無量不可思議諸佛世界」という限定句が削除されて、「穢土」にいる女たちも希望を持てるようになったのは結構であるが、残念なことに源空が「女人往生の願」と呼ぶ「決心」35には「女人往生」という言葉はなく、「復爲女像者不取正覺矣」（また女の像たらば正覺を取らじ）と述べられているだけである。そうすると、源空の方法でテキストを素直に

読む限り、この「決心」で公約されているのは、「男の身体をとらせること」にすぎず、「ブツダにしてやること」とも「アミターバの国に来させてやること」とも言っていない。しかしながら、この場合は「念佛往生の願」や「來迎引接の願」を前提にして読み、「決心」35を「女人往生」の根拠とするのである。

「〔ブツダになろうと〕10回も心を定めて」という意味を表す「乃至十念」の「念」は、「ブツダを心に浮かべること」と理解された。そして、「ブツダを心に浮かべること」は「ブツダの名前を唱えること」に置き換えられた。さらに、そのように解釈された「決心」18に単独有効性が認められた。ほかの「決心」はすべて補足の地位に落とされ、「ブツダになろうと決意すること」も「ボーディサットヴァの活動」も視野から消えたのである。そして、重罪を犯した者やブツダの教えに逆らう者も目に入らなくなった。これでは「悪党も悪党のままで難なくブツダの国へ行ける」ということになりかねない。一つのことに夢中になると、体系の整合性にこだわらなくなるのであり、この点で源空は日本の文化伝統に忠実である。

このように、論理にとらわれずに連想ゲームが進行して、「アミダの名前を唱えさえすれば、だれでもアミダの国へ行くことができる」という主張が導かれることになった。これほどまでの頑張りを支えたのは、音声呪術に対する伝統的な信頼であろう。7音節の極小呪文“namu-amidabutu”の有効性への信頼がまずあり、それを裏付けようとして、好き勝手にテキストを読むのである。

こうして、仏教文献としての『スカーヴァティ・ヴィューハ』とは全く関係のないところで、日本文献『無量壽經』が成立することになった。大乘仏教の原則に反する源空の読み方は、日本オーソドクシーを支える柱となり、以後も日本人に踏襲されて今日に至る。

源空にとって、「阿彌陀淨土」へ「往生」することは、すべての人間に機会が開かれているはずであり、「五障」のせいで嫌われている女も例外ではない。この点を確認したのが「女人往生の願」と呼ばれる「決心」35である。

こうして、「五障」という救い難いハンディキャップを背負う女たちにも「往生」の道が開けることになった。

なお、サンスクリット本は「〔再び〕女の身体を得るようなことがあるなら」とあり、中国語訳では「壽終之後復爲女像者」（壽終の後に復た女の像と爲らば）となっている。女たちが男の身体をとるべき時に言及して、アミターバは「〔今の人生が終わって〕次に生まれ変わる時」と言っているにすぎず、期限を切っていないのである。ところが、「壽終之後」とあるのを源空が読むと、女は死の直後に男に変身して、自動的に「往生」の資格を得ることになる。

『妙法蓮華經』の誤読を前提とする源空の解釈は、広く日本人の間で広く受け入れられ、仏教の伝承から遠く離れて、日本独特のアミダ信仰が成立することになった。仏教のアミターバと違って、日本人に頼りにされたアミダは、この世に住む女たちを死の直後に救済し、ブツダになるつもりがない人々を片っ端から自分の国に引き受けようとしている。

G

「念佛」と「眞言」の関係について、興味深い話が『沙石集』に伝えられている。それによると、源空の高弟であった宗源（1168-1251）は、「死んだ人のタマの幸せを実現するのに最も有効な方法は何か」と天皇から下問があった時に、「寶篋」と「光明眞言」を挙げた。

浄土宗の指導者でありながら「念佛」を挙げなかったのを不満に思った門弟が尋ねたところ、「光明眞言の効果については、『不空絹索神變眞言經』など〔文献〕にちゃんと書かれている。ところが、念仏については、そのような文献根拠（文證）を私はまだ見つけていない。文献根拠のないことを天皇に申し上げることはできない。念仏についても明確な文献証拠があれば、追って申し上げよう」と宗源は答えた（『沙石集』2.8, 『日本古典文学大系』85, pp. 121-122）。師匠の源空が主張する「念佛」について、「道理アレドモ文證ナキコト」と断定しているのである。源空を深く尊敬する宗源は、

「念佛」が自分の世界観に合った正しいことと確信しながらも、仏教の伝承から逸脱していることをよく認識していたのである。

『沙石集』を編集した一円(1226-1312)は、宗源の「偏執ナキ心」を高く評価しているが、公平であるというよりも、体系の違いを気にしないのである。そして、一円自身も「念佛」と「眞言」との間に決定的な違いがあるとは考えておらず、「陀羅尼で浄土往生は容易である」と言い、「南無阿弥陀仏はわずか6文字なので覚えているのが容易であるが、陀羅尼には1文字のもあるので、これも簡単である」と言う(ibid., p. 123)。「眞言」の効果については、「現生ニハ災害ヲ拂ヒ、到来ニハ菩提ヲ得」と言う(ibid., p. 124)。日本語で「菩提」というのは「死後の幸せ」(冥福)のことであり、ブッダに備わるべき「究極の智恵」(bodhi/菩提)とは全く別のものである。

H

『無量壽經』を引用する際に、源空は「十方無量不可思議諸佛世界」という語句を無視して、「決心」35の対象をこの世の女たちと解釈した。源空が行ったようなテキスト処理は、中国に前例がないわけではない。『無量壽經』を引用する際に、善導(613-681)は「十方無量不可思議諸佛世界」から「無量不可思議諸佛」を抜き取って「十方世界」とし、この「決心」の適用範囲を現世の女に拡大している(『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』、『大正』47, p. 27, b.15)。

善導を尊敬していた源空がこの解釈に従った可能性は大いにありえよう。善導に従ったにせよ、たまたま同じ操作を独自にしたにせよ、「五障」および「三従」(父か夫か息子かに服従すること)との関連のもとに源空がこの解釈を出した意義は非常に大きい。源空は「五障」と「三従」に言及して、女が嫌われる理由として挙げている(『無量壽經釋』, p. 76)。心に内在する「五障」と社会規範としての「三従」は、逃れようもない「ふかきつみ」であり、女は「成佛」の見込みがないと日本人は堅く信じていた。このような絶望的な女たちを源空は何とか救おうとしたのである。

日本で読まれた『無量壽經』

源空が試みたテキストの「読み替え」は、疑念を抱く者もないまま今日に至り、仏教学者や国史学者が引用する場合、「十方無量不可思議諸佛世界」という限定句を削除するのが普通であり、削除しなければ無視する。こうして、「變成男子」を行うことが日本アミダの重要な機能となり、「五障」と「三従」に苦しむ現世の女たちにとって、アミダは最後の拠り所となった。

しかしながら、仏教体系のどこにも「五障」や「三従」に相当するものはなく、「女は絶望的である」という命題は、仏教の伝承とは全く無関係に、日本人が勝手に陥った思い込みにすぎない。そして、これは世界観の違いなどというものではなく、単に学力不足のために『妙法蓮華經』を読みそこねた結果である。源空が『無量壽經』を「女人成佛」の典拠としたのは、とんでもなく軽率な読み方をした最澄の解釈を無邪気に継承したからである。

『無量壽經』のテキストそのものは正しく伝わっているのであるから、その気になりさえすれば正しく読めたはずであるし、今でもできる。しかしながら、日本人はあえて間違った読みを固執し続けて今日に至った。これも一つの文化事象である。この意味で、日本で読まれた『無量壽經』は、インド文献『スカーヴァティー・ヴィューハ』とは別のものであり、日本文化のシステムの中で作動する日本文献と言えよう。

源空は善導の『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』（『大正』12, p. 27, b.15）を引用して、もともと「成佛」が極めて困難な女たちも、アミダの「大願力」によって、死の直後に必ず男に変わらせてもらえるという（源空, *op. cit.*, pp. 77-78）。以後に限りなく「轉生」を繰り返すことなど考えておらず、仏教の原則は全く無視しているのである。日本人にとって、究極の目標はタマを静めることであつたが、これを実現するために利用したのが中国から輸入した構想であつた。

「極樂」は「淨土」の同義語であり、阿彌陀の国を指すのに採られた翻訳語であるが、中国人にとっては、ブツダになるための訓練所というよりも、文字通り「この上なく楽しい所」を指す語であつた。もともと、ブツダが前世でした「決心」は、本人の一方的な都合によるもので、自分がブツダにな

るために条件作りをするためであった。ところが、中国人はこの「決心」をエネルギー(力)として巧妙に利用し、はなはだ厚かましいメカニズムの動力源とした。中国人にとって、死んだ後で実現すべき究極目標は、「この上なく楽しい所」(極樂)へ行って最高度の幸せを永遠に享受することであった。この目標を確実に実現するために、一つのメカニズムを作り上げたが、それを動かすエネルギーとして考えられたのが「大願力」であった。

善導によると、女を男に変えるメカニズムを作動させるのも、アミターバの「決心」に由来するエネルギー(願力)であるという(善導, loc. cit.)。そして、これを根拠に、日本人は女が救済されるプロセスを考えたのである。「大願力」と呼ばれる超自然力構想を備えた中国の阿弥陀は、仏教の原則を無視して、日本人の究極目標の実現を可能にしてくれたことになろう。

次に男に生まれさせてもらえるということは、女の身体に特有の障害が除かれたにすぎず、男として苦難の人生を送る中でブツダになるための準備を進めなければならないのである。「決心」35は「女人往生の願」ではなく、まして「女人成佛の願」ではない。

日本人の都合に合わせて女を救う即効性がアミターバの「願力」に期待されたとすれば、『無量壽經』は日本でかなり都合よく読み替えられたことになろう。そして、この読み替えの前提となったのは、『妙法蓮華經』の読み間違えである。

1

「ブツダの国へ行った者の心が再び女の身体に移動するようなことはさせまい」というのがアミターバの「決心」である。したがって、まだ「ブツダの国」へ行っていない女たちは、この「決心」の対象になっていない。この世の女がアミターバの国へ行くための十分条件として、「事前に男に変身すること」が示されているわけではないのである。したがって、「女は往生できない」などという命題は、『大無量壽經』だけからは導くことができない。

前世でボーディサットヴァであった頃のアミターバは、「人々が有名な家

に生まれて来ないようなら、私はブツダになるまい」と公約している（「決心」42）。「女人成佛」の場合と同じ論法を使うなら、「名家出身者でない限り、見込みはない」のであるから、「事前に名家出身者に変身すること」もまた十分条件になるはずである。しかしながら、日本人もそうはしなかった。「變成男子」の場合と違って、傍証となると思われるエピソードが『妙法蓮華經』に見つからなかったからであろう。「女には救いが無い」という結論は、アミターバの「決心」だけからも出て来ないのであり、『妙法蓮華經』のエピソード（サーガラの話）を不可欠な前提としている。しかも読み違いを前提としている。

アミターバの国へ行くための十分条件として、「事前に男に変身すること」が『大無量壽經』で示されているわけではない。ところが日本では、『妙法蓮華經』のエピソードを基に、性転換さえすれば「女人成佛」がもたらされるという着想を得た。このような発想に基づいて、仏教の伝承とは全く無関係に、奇想天外な呪術が開発されたのである。

日本人は「轉生」に考えが及ばなかったし、死んだ直後に「成佛」することを期待していた。そうすると、死ぬまでに何か手を打たない限り、「成佛を妨げるもの」が内在する以上、女たちは救われなくなる。そこで、生殖器官の取り換えが起こる話から着想を得て、呪術によって性転換する方法を開発したのである。これが「變成男子の法」である。

J

性転換呪術を開発したとはいえ、「これを用いると女の身体に男性生殖器が付いた」という話は日本に伝わっていない。さすがの日本人も、すでに女として生まれてきた者を自由自在に男に変えたわけではない。日本で開発された「變成男子の法」は、母親が妊娠中に行われたのである。

胎児が女である場合は、この呪術によって胎内で性転換が起こり、胎児は男として生まれることになる。胎児がもともと男であったら、この呪術は無意味になり、呪術師に支払う費用が無駄になろう。しかしながら、妊娠中は

男か女か分からないので、「變成男子の法」は保険として行わざるをえなかった。日本人が開発した奇想天外な呪術は、「胎児を必ず男として出産させる技術」として用いられたのである。

日本の貴族社会で「變成男子の法」は「成佛」と無関係に行われた。『平家物語』の伝えるところによると、天皇に嫁いだ娘のために平清盛が行わせ、まんまと安徳天皇を生ませている（『平家物語』、『日本古典文学大系』32, p. 210）。「胎児を必ず男として出産する技術」は、孫の皇位継承を確実にするために行われたのであった。そして、腹黒い後醍醐天皇の場合は、もっと込み入っていて、この呪術が政争の武器として使われている。中宮の懐妊祈願と称して「變成男子の法」を行わせ、関東調伏呪術のカムフラージュとして利用したのである（『太平記』、『日本古典文学大系』34, p. 42）。

江戸時代になると、「胎児を必ず男として出産する技術」として、「變成男子の法」は庶民にまで及んだようであり、西鶴の『世間胸算用』によると、跡継ぎを望む裕福な商人の家では、出産直前の行事の一つとして、掛かり付けの山伏を呼んで「變成男子の法」を行わせた（『西鶴』、『本古典文学大系』48, p. 228）。

比叡山の阿闍梨や大阪の商家に出入する山伏は、超能力があるかどうかはともかく、ブツダになろうとする意志がない。また、このような連中を使う人々にしても、ブツダになりたいなどは夢にも思ってもいない。「變成男子の法」は仏教の伝承を伝えるものではなく、仏教を受け入れなかった日本の文化伝統の中で独自の発展をした事象である。

K

仏教を正しく継承していたのなら、今はたまたま女の身体をとっていても、慌てる必要は少しもなく、ゆっくりと「轉生」を繰り返し、そのうちに男として生まれればよい。ところが、日本人はひどく焦っていて、できれば生きている間に決着をつけたがり、少なくとも死の直後に目標を達しようとするのである。

仏教で女が男になるというのは、「轉生」を前提にしたものであった。身体が死んで「心」(vijñāna)の移動が起こる際に、古い身体の形態とは無関係に、新しい身体の形態が決まる。前のが人間の身体であるからといって、次のが人間の身体であるとは限らず、前のが女の身体であるからといって、次のは女の身体とは限らないのである。女の身体から男の身体に「心」が移るのは、ごくありふれたことである。

確かに仏教には超高速度性転換の伝承があり、「轉生」のプロセスが一挙に短縮される話が伝えられている。ただし、この種の話で語られているのは、超自然力が働いた場合であり、ブッダになるプロセスとしては異常である。これは奇跡であり、ブッダになろうとする異常に強い意志が前提となり、その際には何かの超自然力が宿る言葉が発せられる。

ところが、日本人は「轉生」を信じていなかったもので、死ぬまでに何とか決着を付けようとした。浄土宗や浄土真宗で日ごろ唱えられているフォーミュラに、「この身、今生において度せずんば、さらにいずれの生においてか、この身を度せん」という言葉がある。ここにはしなくも現れているのは、「轉生」を前提とするインドの世界観に対する強い拒否反応である。

跡継ぎを望む日本人は、胎児を男として生まれさせることにこだわり、それを手軽に実現する技術として、「變成男子の法」の有効性を信じた。日本人にとって「轉生」こそ異常現象であり、これに比べれば、同一の個体に起きる性転換の方が遥かに信じやすかったのであろう。

The *Wu-liang-shou-ching* in Japan: A Guarantee of Women's Becoming Men

Nobuhiko KOBAYASHI

Having misread the *Fa-hua-ching* 法華經, the Japanese are convinced that women cannot become buddhas. With this conviction they are compelled to find a way to save hopeless women. Genkū 源空 (1133-1212) tries to solve this problem on the authority of the *Wu-liang-shou-ching* 無量壽經: He says that, according to this sūtra, Amida-butsu 阿彌陀佛 vowed in his previous existence to turn all women into men.